注意事項

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。
小説の作者・「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【タイトル】
魔法先生ネギま！　～麻帆良に舞い降りた天才～

【作者名】
水槽

【あらすじ】
これは幼き英雄の卵が教師として麻帆良に降り立つ１年程前の出来事。麻帆良学園理事長、並びに関東魔法協会の理事を務める近衛近右衛門。その老人の元にある情報が届く。それは自身の義理の息子であり、英雄と呼ばれる名高い剣士の敗北を知らせるものだった。
時を同じくして、とある少年が麻帆良学園中等部に入学する。凍てつくような薄皮の下に、煮えたぎるような熱い激情を宿した少年が……。

嵐の幕開け

雷鳴轟く嵐の夕刻、業務も終わり、ようやく腰を椅子から上げた近右衛門だったが、その矢先、無慈悲な着信音が学園長室に響き渡った。老人の持つ携帯電話には、自身の娘の名が表示されていた。すでに中学生になる子供がいる年齢だが、親にとってはいつまでも可愛い娘である。仕事の疲れもいくらか和らぎ、穏やかな気持ちで電話に出た近右衛門であったが……。

「何じゃと……!?」

その良い気分は一瞬にして吹き飛び、窓の外の嵐のような暗雲が老人の心に立ち込める。

「落ち着くのじゃ、落ち着いて一から説明せい……！」

嗚咽交じりに言葉を紡ぐ娘に一喝を入れる。その内容は親子の間だけで片付けられる問題ではないのだ。この日本で2つに別れた陰と陽、そのバランスが崩れるかもしれない重大な問題である。聡明な老人はそれを瞬時に察し、娘に厳しい言葉を投げかけた。

「そうか……、分かった。とにかくお前は彼の傍にいてあげなさい」

娘に伴侶としての務めを諭し、近右衛門は電話を切った。

「何ということじゃ……」

実の娘の口から語られた悲報、それは彼女の夫であり、近右衛門の義理の息子である男が賊に敗北し、意識不明の重態だというものであった。

近衛詠春――かつて魔法世界で起きた戦争を止めた英雄の一人で、名実共に最高クラスの剣士である。そして今は近右衛門が理事を務める関東魔法協会と対立状態にある関西呪術協会の長でもある。

その彼が敗れたということにより、２つの重大な問題が浮上する。１つは彼を打ち破るほどの腕を持つ者が少なくとも現在この日本にいるであろうということ。そもそも英雄と呼ばれる彼を超える者など極僅かしかいない。その者が日本にいようがいまいが脅威であろう。

もう１つの問題は関東魔法協会、関西呪術協会の対立状態の悪化である。東にとってはこれ幸いと攻勢に出ようとする者が現れることが予想される上、その賊が東の者だと疑う西の者も現れるだろう。

（はてさてどうしたものかの……）

２つの組織の和平を望む近右衛門としてはこの情報をそのまま味方に報告させるわけにはいかない。少なくとも賊の身元のおおよそが判らなければ、身動きがとりずらい状況である。だが、先程の話では賊の顔すら分からないという。

（まさか）

近右衛門の頭の中をある秘密組織の名がよぎる。かつて世界を破滅に向かわせようとした組織である。

（奴らならば詠春殿を負かすこともできなくもないじゃろうが……）

それにしては手口が大雑把すぎる、彼らではないと近右衛門は結論付けた。

（今はそれよりもこちらの警備を強めることの方が重要かの）

その賊がこちらを狙ってこないという保証もない上、西の暴走も危惧しなければならない。

しかも今は3月の末、もうすぐ新入生としてこの学園都市の門をくぐる者が大勢いる。彼らに危害が加わることは決して許してはならない。

老人はそう決意を固めた。その決意、考えが結果的に自身の首を絞めることになるとも知らず……。

白き飢え

「学園長、それは本当ですか!?」

すでに夜の１０時を回った頃、出張から麻帆良学園都市へと帰ってきたタカミチ・Ｔ・高畑であったが、突然の呼び出しを受け、今こうして近右衛門と対峙している。

「全て事実じゃ」

近右衛門も出張から帰ったばかりのタカミチと同様、いやそれ以上に疲弊した様子。無理もない、和平を望む組織の長が倒れただけでなく、彼は義理の息子でもあるのだから。

「いいか、タカミチ君。この情報は他言無用じゃ。少なくとも今はな……」

何故、とは言わない。タカミチも詠春ら『紅き翼』と呼ばれる英雄集団と戦争を戦い抜いた猛者である。その経験から大方の理由は察することができるだろう。そしてそのタカミチを信頼しているからこそ近右衛門も彼だけには真実を告げた。

「西の方は今どうなっているのですか?」

「まだ何とも言えんの。おそらくはかなりどたばたしているじゃろう。長が倒れたこともそうじゃが、あそこも一枚岩ではないからの」

関西呪術協会にはいくつかの派閥があり、特に過激派と呼ばれる者達と詠春との折り合いは悪い。この様な状況のため、組織内での情報伝達等も一歩遅れることもあり、現在は混乱を極めているだろう。

「ッ!?」

2人の間を緊張の糸が張りつめている時、再び近右衛門の携帯電話が着信音を発する。今度は近右衛門の娘ではなく、詠春の直属の部下からのようだ。

「何じゃと!?　目撃者が!?」

その言葉に近右衛門だけでなく、タカミチの目も見開かれる。

「そ、そうか……。情報、感謝じゃ、ありがとう……」

しばらく興奮気味に応対していた近右衛門だったが、電話を切る頃にはすっかり疲れ切ってしまった様子だ。

豪奢な椅子に深く腰を落とす老人にタカミチは詰め寄る。

どうやら、過激派の1人が賊を目撃していたらしい。横目に捉えただけだったそうだが、その特徴的な髪の色をしっかりと覚えていたようだ。

「それで、その賊の特徴は!?」

狼狽するタカミチに近右衛門は静かに口を開く。

「白じゃ……」

「何ですって?」

はっきりしない近右衛門にタカミチはさらに問う。

「白髪の、少年のような、あるいは青年のような風貌だったそうじゃ……」

その言葉にタカミチの顔から血の気が引く。そう、彼らには心当たりがある。英雄を超える力を持ち、白い髪を持つ『人間のようなもの』に……。

麻帆良の実力者2人が戦慄しているのと時を同じくして、京都のどこも知れぬ道を1人の少年が歩いていた。

年の頃は12か13、身の丈は160程、深く被ったフードから覗くのは色が抜け落ちたような白い前髪、そして底なし沼のような深く、暗い瞳……。

「足りない……」

嵐の中、独り歩きながら、少年は呟く。吹き荒れる風が大粒の雨と共に少年に叩きつけられるが、少年はそれを意に介せず、ただ自然と歩いて行く。

「こんなものでは、まるで満ちない、満たされない……」

不満のような言葉を漏らす少年だが、それを言い終えた瞬間、自分の歩みを止める。今まで俯き気味だったその顔が前を向く。少年は口を閉ざし、ただ前を見つめていた。

「僕の気配に気付くとは……、やるね、君」

賞賛の言葉と共に、どこからともなく傘をさした少年が現れた。傘の下から覗くのは白い髪、無機質な瞳。見た目だけなら10歳前後の子供のようである。

「見たところ、肉体的にはただの人間のようだけど、君は何者だい？」

肉体的にはただの人間……、しかし気配が違う。ただの人間とは一線を画す存在であることは一目瞭然であった。まるで少年のいる場所だけ深海であるかのような、この嵐の中でも一際温度が低いように感じる。

「……」

人間である少年は答えない。それに痺れを切らしたのか、人間でない少年がさらに言葉を紡ぐ。

「そうだね、まずはこちらから自己紹介といこうか。僕の名前はフェイト・アーウェルンクス。魔法使いとだけ言っておこうか」

「名前などどうでもいい。見たところ、肉体的には人間でないようだけど、あんたは何者だ？」

人間である少年がフェイトの自己紹介に返したのは挑発の言葉だった。フェイトは眉を少し上げ、感心した様子だ。

「へぇ、思った以上にやるようだね。近衛詠春を倒しただけのことはある」

「随分耳が早いじゃないの、フェイトさん？」

「別に呼び捨てでも構わないんだけどね。君と近衛詠春の闘いを見たわけではないけど、それぐらいは知っておかないとね」

会話の内容にさえ目を瞑れば、まるで世間話でもしているかのような穏やかな雰囲気である。

「じゃあ僕はこれで失礼するよ。君の実力のおおよそを掴めただけでも収穫だ」

そう言い残し去ろうとするフェイトだが

「ククク……、何言ってやがる。俺の前に出てきて何もせず帰るだって？　俺はあんたと命の取り合いがしたい……！」

先程と全く同じ雰囲気のまま、少年が言い放った。まるで、命を賭した勝負を日常としているような、そんな歪な印象を受ける。

「今はその時じゃない、君だって分かるだろう？」

「……」

フェイトの言う通り、少年もいまが勝負の場でないことは分かっている。だがそれでも、目の前の相手――フェイト・アーウェルンクスと闘いたいという欲求は大きい。少なくとも、近衛詠春よりは楽しめる、そう少年は確信している。自身が命を賭すに値すると。

「安心しなよ。またいずれ、近いうちに会うことになるよ。君と僕は」

少年も興が削がれた様子で、これ以上の引き留めはしないようだ。

「そういえば、まだ君の名前を聞いていなかったね」

「――」

少年が名を告げると同時に雷鳴が轟く。だが、フェイトの耳にはしっかりとその名が届いていた。

「ではまた会おう、アカギ君」

そう言うと、フェイトは水の転移魔法を使い、消えて行った。

「ククク、楽しみだ……」

アカギは独り呟き、再び歩き始めた。嵐の吹き荒れる闇の中へと……。

桜の門

「ククク、制服か。壊滅的に似合わねえな……」

麻帆良学園本校男子中等部のトイレで1人の少年が呟いた。ある嵐の日、関西呪術協会の長である近衛詠春を打ち破った者――アカギである。

ほとんど座っているだけという退屈な入学式を終え、これまた退屈な事しかない教室へ向かう途中、用を足しにトイレに寄ったのだが、何気なく覗いた鏡に映った自分の姿に、思わず先程の言葉が口をついてでてしまった。入学式の前、部屋で着替えた時は鏡など見ずに来てしまったため、自分の制服姿を拝むのはこれが初めてである。えんじ色のブレザーが壊滅的に似合っていない。

「さて、行くか」

一見気にせず自然に歩いているアカギだが、内心ではあまりの不似合さに少しショックを受けていた。こればかりはどうしようもない。とぼとぼと歩くその後姿には、とても中学1年生とは思えないほどの哀愁が漂っていた。

「失礼します」

ノックと共に学園長室にメガネをかけた柔和な男性が入ってきた。

「おお、タカミチ君。入学式、ご苦労じゃった」

「いえいえ、僕はそのまま1―Aから引き継ぎで上がっただけなので楽なものでしたよ」

学園長と教師という立場で話していた近右衛門とタカミチだったが、次の瞬間にはすでに魔法使いと戦士の顔になっていた。

「詠春さんはまだ……？」

「うむ……、治癒を妨害する呪いを掛けられているようでな。まだ意識を取り戻さないそうじゃ」

詠春が倒れてからすでに3週間が経っている。関西呪術協会の手練れ達が治癒に努めているが、それでも目を覚まさないという。命の危機は去っているようだが、それでも深刻な状態であることに変わりはない。

「我らも今そちらに気を配っている場合ではない。警戒を緩めぬようにな」

予想していたことだが、すでに関西呪術協会の呪術師達が様々な方法で麻帆良に攻撃を仕掛けている。昔から小競り合い程度の衝突はあったものの、ここまで表面化はしていなかった。過激派という詠春を快く思っていない連中はこれ幸いと今回の事件を大義名分にし、それを止めるはずの穏健派も今はその役目を全うできていない。

「とにかくじゃ、タカミチ君。生徒たちの安全が第一じゃ。もしもの時は頼りにしておるぞ」

「はい、この命に代えても」

特に彼が担任として受け持つクラス――本校女子中等部2―Aは裏の世界では重要な人物が多く在籍している。その中には近右衛門の孫であり、詠春の娘である近衛木乃香、タカミチが親代わりとなっている神楽坂明日菜もいる。それでなくともこの学園都市に住まう者達、その全てを護らなくてはならない。

先程の言葉をもう一度、胸で唱えながら、タカミチは学園長室を後にした。

「ハァ……、悪くはないが、退屈なものだな、学校というのは」

初日ということで簡単なガイダンスのみの授業だったが、アカギにはとても長い時間に感じられた。

（昼飯はコンビニで済ますか）

寮には食堂もあるのだが、あまり賑やかな場所が好きではないアカギにとってはあまりとりたくない選択肢である。学園都市ということもあって近くにコンビニがいくつか点在しているのが幸いだ。

コンビニへの道のりを歩き始めたアカギだったが、その時前から何かがものすごいスピードで、砂煙をあげながらアカギの方へと迫ってきていた。

どうやらそれの正体は女子生徒のようだ。明るいクリーム色の髪に褐色の肌。スポーツ少女のようだが、明らかに一般常識の範囲外の脚力で走っている。

アカギは片手に焼きそばパンを持ったその少女が自身の横を駆け抜けていくのを少し驚きながら見送った。

「ククク、どうやらこの学園は思ったほど退屈でもないらしい」

高揚気味にそう口にしながらアカギは少女が残していった砂煙に視線を落とした。春の心地よい風に砂煙はそこから退き、そこから別のものが顔を出した。

「これは、さっきの奴の生徒手帳か」

今の一連の流れで埃を被ってはいるが、物自体は真新しい。今年度支給されたばかりの新品だろう。

「女子中等部2―A、名前は……、こ？　ふる？　読めねえな……」

手に取り中身を拝見するアカギだったが、肝心の持ち主の名前が読めない。アカギ自身学校の勉強などほとんどしていないが、そこそこ真面目に勉強している中学生でも初見でこれを読むのはまず無理だろう。

「仕方ねえな……、届けに行くか」

他に面白いものが見れるかもしれないと、アカギは期待を抱き女子中等部の校舎へと進む。何かが見えるかもしれないと期待を抱き、落とし物を届けに行くという、一歩間違えれば覗き魔のような変態扱いを受けてしまうかもしれない状態だが、アカギはそのことに気付いてはいない。

「アスナ、また担任が高畑先生でよかったなぁ～」

「うん！　これでまた1年、いやこれから先もずっと担任でいて欲しいな～」

女子中等部の校舎から2人の女子生徒が出てきた。1人は快活そうな、オッドアイが特徴の少女、もう1人はいかにも大和撫子の卵といった感じの少女だ。

「ほんまアスナは高畑先生のこと大好きやなぁ～、うち嫉妬しちゃうわぁ」

「な、なんでこのかが嫉妬するのよ！　それに大好きって言っても高畑先生は親代わりみたいなものだし……」

1人でブツブツと念仏のように唱え事をしている友人を傍目に、木乃香はある人物を見つける。

「あ、男の子やわぁ～」

「え⁉　男⁉」

木乃香の言葉に明日菜は自分の世界から帰還し、校舎へ入ろうとする少年へ詰め寄る。

「あんた、ここは女子中等部の校舎よ！　男子は入っちゃダメなんだから！」

弟を叱る姉のように明日菜は言ったが、どうにも彼女の方が子供っぽく見えてしまう。

「ああ、そうなんですか、それは大変失礼を。ですがこちらもちょっと用があってね。代わりにこれを届けてくれませんか？」

そう言って白髪の少年――アカギは生徒手帳を明日菜に渡した。

「こ、これってくーふぇの？」

「お知り合いでしたか、それは好都合。名前が読めなくてね。直接渡せればよかったんですが、ものすごいスピードでどこかに行ってしまいまして」

「そ、そう。ありがとう」

明日菜は少し申し訳なさそうに感謝の言葉を呟いた。

「君新入生？」

そこへひょいと顔を出しながら木乃香がアカギに問う。

「ええ、まぁ」

「やっぱり、くーへの名前が読めないってことはここに来て間もない証拠だと思ったんよ」

「このか、頭いいわね」

へへーと子供のような、誇らしげな様子で木乃香はさらにアカギに問いを投げかける。

「君名前は？　ウチは近衛木乃香、こっちの娘は神楽坂明日菜」

「アカギ……」

「アカギ君かぁ～、何か分からないことがあったらお姉さん達に何でも聞いてええよ～」

「フフ、ありがとうございます。近衛先輩、神楽坂先輩。では俺はこの辺で」

「近衛か……」

女子中等部から男子寮への帰路、アカギはぽつりと呟く。

（おそらくはあれが近衛詠春の娘）

自分の父を傷付けた男に笑顔を向けるなど、皮肉なものだとアカギは内心嗤っていたが、それは極めて些細なこと。彼女について考えることはその身体に内包した恐るべき魔力量だ。少し実力のある裏の者なら気付くであろうその容量。もちろんアカギは見抜いていた。

（だが……）

木乃香の膨大な魔力量に気付く者でも、その大半はそこで終わりだろう。

（真に特異なのはむしろあのオッドアイの女……！）

アカギは気付いていた。神楽坂明日菜の持つ異常性――魔法を扱う者に対するジョーカーとなりうる能力に。

だが、この時のアカギはまだ知らない。彼女が自分の思っている存在よりも、さらに重要、それこそ世界の鍵を握る人物であることを……。

視えぬ不安

（何だったんだ……、あの男は……）

深夜の女子寮、自室のベッドから起き上がりながら、少女――桜咲刹那は考える。内容は昼間見たとある少年についてである。

彼女は自身の希望と恩人の頼みにより、ある少女の護衛の任に就いている。といっても時間の空いているときに影から見守るだけ、というささやかなものではあるが。

（奴は、おそらく裏の者だろう。木乃香お嬢様を狙っているのか……？）

ある少女とは近衛木乃香のことであり、奴とはつまり、アカギのことである。刹那は昼間木乃香とアカギの接触を見ていた。最も見た限り、聞いた限りでは取るに足らないような、特に問題ない接触であった。

だが、刹那はアカギに言い知れぬ危険の匂いを感じていた。

（やはり学園長に相談すべきか……）

刹那は自身の評価として、実力はまだ未熟であるが、出自がやや複雑であることにより、人物や状況に対する洞察力、判断力はそこそこ優れていると考えている。またそれが優れていなければ話にならないとして、日々剣術の鍛錬と共に、そういったスキルを磨くことも怠ってはいない。

木乃香の持つ力は強大であり、とても魅力的なものだ。力尽くで利用しようとする者もいれば、懐柔や心の隙間に取り入る形で利用しようとする狡猾な者もいるだろう。そういった者達を退けるためにも、力以外の技術が必要となる。

本来ならば、木乃香のもっと近くでその任を全うできればいいのだが、彼女はその選択肢をとりたいと思いつつも、ある事情から踏み出せないでいる。

（私に分からないことでもあの人ならば見抜いてくれるだろう）

刹那はそれでも、アカギの全体像や実力を測れないでいた。自身の実力でどうにもならないのならば、昼間の内に近右衛門に相談していただろう。自身の実力でどうにかなりそうならば、警戒を強めるだけだ。

だが、分からないのだ。まるで靄がかかったかのように。裏の者特有の匂いは感じ取れなかったが、アカギが普通ではない、それこそ異端であるということは纏う気配から察すことができた。余事象的な考え。だからこそ、気持ちの悪い不安だけが残ってしまう。

（いけないな。そろそろこちらの方に意識を集中しなければ）

刹那は自身の愛刀を見つめる。これから彼女は学園の警備に回らなければならない。本来ならば生徒である者が警備をしなければならないということはないのだが、人手不足と経験を積むということで有志で参加を許されている。

京都からこの麻帆良に来てまだ1年しか経っていない刹那だが、以前はここまで警備に気合を入れて行くということはなかった。というのも、以前は本当に巡回をするというだけで、敵である妖の類はほとんど手練れの教師陣が相手をしていたからだ。

だが、最近になって状況が急変した。麻帆良に現れる敵の数が急激に増えたのである。そのほとんどが召喚された下級の妖怪である。そのため、生徒たちにも戦うことが求められる状況になってしまった。

麻帆良の外からでもある程度コントロールできる下級の妖怪を召喚している周到さや、それらが東洋の妖怪であることから、十中八九

関西呪術協会の刺客だと考えられているが、確たる証拠がない以上こちらからあまり大きなアプローチはできない。

「龍宮、そろそろ行くぞ」

狸寝入りをしている同居人に声をかけ、刹那は愛刀を握りしめ立ち上がった。

「ん？」

男子寮の一室、入居者が奇数であったため、運よく1人部屋を引いたアカギは、外、遠くからある匂いを感じ取った。

「この学園は夜になるとドンパチ騒ぎでもやんのか……？」

そう、戦いの匂いである。常人には理解できない感覚。ほとんどの者が一生を懸けても得難い感覚を、この若さでアカギはすでにその身に宿していた。

「まぁ、俺には関係ねぇな」

否、関係も何もこの事態のほとんどがアカギの責任と言えるだろう。だが、表の世界の情勢にも、裏の世界の情勢にも興味のないアカギには全く知りえないことである。いかにアカギといえど、興味のない、判断材料のないものにはその才気を見せることはなかった。

「学園長、少しお話があるのですが」

「おお、刹那君か。どうしたのじゃ？」

まだ陽が昇るには早い頃、麻帆良の象徴ともいえる神木・蟠桃――通称、世界樹の麓で警備の指揮を執る近右衛門に刹那は話しかける。

人手不足であり、有志で募ったとは言え、生徒を陽が昇るまで警備に遣う訳にはいかない。生徒の仕事はここで終わりである。

刹那ら生徒や他の教師陣と違い、この老人は毎日警備の指揮を執っている。本来なら睡眠等大丈夫かと心配するところだが、仙人あるいは妖怪のようなこの老人には無用なものだ。

「木乃香お嬢様のことなのですが」

「何じゃと？　言うてみい」

いつもならまた刹那の過保護かと、飄々とした態度で向き合うのだが、今回の近右衛門は違う。詠春の一件もあってか、少々ピリピリしている。

老人の様子に少し違和感を覚えた刹那だが、それも些細なことであり、本題へと話を進める。

「昨日の昼間、女子中等部校舎の前で、どうやら裏の者と思しき男が木乃香お嬢様と接触したのを目撃しました」

自分たちの関係者ではないか、と一瞬考えた近右衛門だったが、すぐにそれを捨てる。刹那は既に味方の顔は把握しているはず、そうなるとやはり不透明な人物なのだろう。

「なるほど、詳しく話してみせい」

「は。名前はアカギ、どうやら男子中等部の新入生のようです。風貌の特徴としてはその頭髪の色でしょうか」

少し表情の曇った様子の刹那だが、その理由は近右衛門には分から

ない。

「白でした。色の抜けおちたような真っ白な髪……」

「ほぉ……」

自分の髭を撫でながら考える近右衛門だったが、すぐにあることを思い出す。

「待て。白髪じゃと!?　それは真か!?」

老人は狼狽する。そう、この老人はつい最近白髪という特徴の者についての重要な情報を手に入れている。それを知らぬ刹那には近右衛門の狼狽が不思議でならなかった。

「な、何か重要な人物だったのですか……？」

刹那は恐る恐るといった様子で近右衛門に尋ねる。いつも飄々としているこの老人がここまで動揺するということは、それこそ、かなりの危険人物だったのではないか。刹那の顔から徐々に血の気が引いて行く。

「い、いや何でもない。おそらく問題はないじゃろうて。刹那君が心配するようなことは何もありゃせん。後は儂らに任せておくのじゃ。さぁ、今日はもう帰って寝なさい」

不安がる刹那を宥めるように近右衛門は言う。

「わかりました。では失礼します」

だが、刹那の不安は消えない。普通ならば、近右衛門ほどの人物にあそこまで言われてしまえば、大抵の人間は安心するだろう。しかし

それが問題なのだ。あの老人がああも人を安心させる言葉を並べ立てる、それがかえって刹那の心に暗雲が立ち込める原因となっていた。

自分が考えても分からぬと思いながらも、刹那は悩む。今夜は眠れないだろうと思いつつ、寮への帰り道を刹那は憂鬱な気持ちで歩き始めた。

刹那が立ち去った後、近右衛門は1人、ある可能性について考えていた。

（まさか、同一人物か……？）

詠春を打ち破った賊、それと先程刹那が話した男が同一人物ではないかという可能性である。本来ならば、紙ほど薄く、毛ほどに細い可能性。だが、この老人はその可能性にどこか確信めいたものを持っていた。

理屈ではない。ただの勘だ。しかしそれは長年磨き続けた、信頼に値するものだと近右衛門は自負していた。

（とにかく、調べてみるしかあるまい）

この麻帆良は、言うなれば近右衛門にとっては庭のようなものである。生徒1人に関して調べるなど簡単だ。

だが、すでに近右衛門はその先のことについて考えていた。もしあの賊が麻帆良の生徒だと知られたら非常にまずいことになる。それこそ爆弾を抱えているようなものである。

（もしもの時は……）

選択肢としては２つ。１つはこのまま賊の正体を暴かず隠し通すこと。詠春さえ目を覚ませば、あとは交渉で今の状況をどうにかできると近右衛門は考えている。そしてもう１つは……

（賊の首を、差し出すか……）

怒りと憧れ

（あれから一週間か……）

刹那がアカギを初めてその目で見た日から既に一週間が経っている。近右衛門に心配するなと言われた刹那だが、それでもアカギのことが頭か離れなかった。それほどまでに刹那にとってアカギの印象は強烈なものであった。

（何か進展はあっただろうか）

この一週間、アカギが木乃香に接触した場面はなかった。しかし、常にアカギの存在を気にしながら木乃香を護衛するのにも、刹那は少し辟易していた。なにより、アカギに気を取られている自分が許せなかった。

しかし、転機は不意に訪れた。

「あ、あれはっ……！」

放課後、木乃香が部活動中であるため、手持無沙汰でとぼとぼと歩いていた刹那の目の前に現れたのはアカギ。この一週間刹那を悩ませ続けたアカギである。

（これは良い機会かもしれない）

思い立ったが吉日、刹那はアカギを尾行することにした。幸いなことに刹那は尾行には慣れている。アカギに気付かれるかもしれないという発想はこのときなかった。

ブレザーは着ていないが、制服姿でこの学園都市を歩くこと自体は

何も不思議なことはない。だが、ことアガキに関しては事が違う。刹那の目にはその姿が明らかに異質、この学園という空間から浮いて見えていた。

（やはり、この男には何かある）

後ろからアカギの正体を見破ろうする刹那だが、やはり分からない。

だが、そうこう考えている内にある違和感に気付く。

（ま、まさか……、気づかれたか……!?）

少しずつ、少しずつではあるが、アカギは人通りの少ない道へと進んで行く。それだけなら特に気にも留めないが、今尾行している相手はアカギである。尾行に気付き、こちらを誘っているのかもしれないと疑心暗鬼になる刹那だが、それでも止まらない。

気が付けば既に周りに人気はなく、舗装された道もない、林の中である。この時点でアカギが十中八九自分に気付いていると考えた刹那だが、それでも退くことはできず、距離を十分に取り、息を潜めているだけだった。

と、その時。標的が止まった。アカギがその足を止めた。

刹那の額に汗が浮かぶ。極度の緊張状態に、既にいつも持ち歩いている自身の愛刀を握りしめていた。

「ハァ……、いい加減やめにしようぜ、こんなこと」

瞬間、刹那の全身に衝撃が走った。それこそ物理的に攻撃されたと思わず錯覚しそうになるほどの。

（くっ……！　どうする……!?）

ここがそれこそ最後の分岐点だと刹那は確信した。ここで退かねば、その先はない。だがそれでも、刹那は退かなかった。何故かは自分でもわからない。

「いつから、気付いていた……？」

刹那はアカギとの距離を、会話ができるほどまで詰める。その手にはすでに抜身の太刀がある。

「さて、どうだろうね。まぁ、本当の最初は一週間前と言っておこうか」

「まさか……、あの時既に気付いていたというのか……！」

木乃香の護衛中、偶然アカギを視認した時、既に自分の存在に気付かれていたという事実に刹那は驚愕する。

「貴様っ……！　木乃香お嬢様を狙う刺客か⁉」

刹那にとっては自分が危機に瀕していても、やはり気にかかるのは木乃香のことだった。

「ククク……、さぁね……？」

それを聞いた瞬間、刹那は自分でも驚くほどの速度でアカギへと近付き、太刀を振り下ろす。

「どうした？　そのままいけば俺を殺せるぜ？」

刹那の太刀はそれこそアカギに触れるか触れないかのギリギリで止まっていた。躊躇したのだ。仮にも人の姿をしているものを殺すのに。

刹那は震えていた。目の前の男を殺す覚悟がなかった自分に怒りを感じて、ではない。アカギの異常性に震えていた。
確かに自分はこの男を殺す気で太刀を振り下ろした。少なくともギリギリまでは。しかしアカギは動かなかった。少しの恐れ、震えもなくただ止まっていた。自分の太刀筋が見切られていなかったという考えは刹那にはなかった。この男の顔がそうではないことを物語っている。

（何故だっ……!?）

普通ならば、いやそうでなくとも震えるだろう。自分が死なない、あるいは強固な魔法障壁が張ってあって、刹那の斬撃が自分に届かないと思っているならば別だ。しかしこの男は違う。自分がこのままでは死ぬと分かっていて、眉一つ動かさなかった。それが刹那には理解できなかった。

「ククク、あんたに1つ教えてやる」

太刀がまだ自分の目の前にある状況でアカギは口を開いた。

「何をだ……!?」
「あんたの俺に対する敵意の出所だ……！」

刹那はその言葉に怒りを感じる。そんなものは決まっている。お前が木乃香お嬢様に危害を加える可能性があるからだと。

「さっき言っていた木乃香お嬢様とやらに関係することじゃないぜ……？　あんたのその理屈の通じない、理不尽な敵意はもっと別のところから来ている……！」
「き、貴様っ……！　なにを世迷言を！」

刹那の手にさらに力が籠る。しかし、怒りと同時にその答えを知りたいとも思ってしまった。

「俺は既にいくつか修羅場を潜り抜けてきた。そしてその過程で、弱い人間は俺に恐怖するということがわかった」

「それがどうしたっ……！」

「あんた、純粋なヒトじゃないだろ……？」

その時、刹那の中で何かが崩れ始めた。自分に関することで、最も人に知られたくない秘密。それをたやすく見抜かれてしまった。

「そしてあんたはヒトに憧れを抱いている……！　だから俺が許せないんだっ……！　普通の人間は、人間でありながら、人間的でない俺に恐怖する……！　だが、あんたは逆だ。人間に憧れているから、人間でありながら、人間的でない俺に怒りを抱く。何故私が人間でなくて、こいつが人間なんだとっ……！」

アカギの言葉と共に、刹那の全身から力が抜けて行き、ついにはその場に膝をついてしまう。

「結局あんたの怒りは、敵意は、自分の劣等感の裏返し……。そんな三流の怒りじゃ俺が相手をするまでもない……！　このままじゃあんたは誰かに殺されるまでもなく自滅する……！　自決するほどの意志もなく、ただ自滅するのみっ……！」

へたり込み、俯く刹那を尻目にアカギはその場を立ち去る。この瞬間、桜咲刹那はアカギに完全に敗北した。闘うことすら叶わずに……。

血塗れの歯車

「ううむ……、やはり出てこんか」

複数存在する学園長室の１つ、女子中等部に設置されたその一室で、近右衛門は唸る。

(刹那君からアカギについての情報を受けてから、早１０日……、その間に収穫がまるでなしとはの……)

近右衛門は知る由もないが、アカギと刹那の邂逅より３日が経っている。自らの豊富なネットワークを駆使し、アカギについて調べていた近右衛門だが、不気味なほどその情報量は少ない。詠春を打ち破るほどの実力者についてここまで裏に関する情報が出てこないとは、異常であると言う他にない。

「学園長、失礼します」

放課後になり、近右衛門が物思いに耽っていると、何やら疲れた表情のタカミチが現れた。無理もない。生徒と違い、教師陣は麻帆良の警備に回される頻度が多く、タカミチはその中でも頭一つ以上優秀であるため、その比重はさらに重くなる。

「おお、タカミチ君か……」

だが、それは近右衛門にも言えることだった。最も、近右衛門はアカギに関する事案も抱えているためでもあるが、タカミチはその様子を少し不思議がりつつも、自分と同じように疲れているのだろうと特に気には留めなかった。

（そろそろ限界かの……）

アカギのことはまだタカミチにも伏せてあるが、それももう限界である。ここが分岐点。タカミチと協力し、アカギに接触する。これ以上泳がせるのは危険だと近右衛門は判断していた。

「刹那君のことなんですが」

「なんじゃと？」

刹那と言えば、アカギに関しての情報を最初にくれた人物である。何かあったのかと思い、近右衛門はタカミチに先を促す。

「実は一昨日から授業を無断で休んでいるんですよ。彼女の事情に関しては学園長の方が詳しいですし、何か知りませんか？」

「ま、まさか」

近右衛門が行き着くのは最悪の可能性。刹那がアカギと接触した可能性である。

（在り得る、十分に……！　もっと早くに此方からアカギにコンタクトを図るべきだったか……！）

クラスで何かあったのなら、それこそタカミチ気付いているはず。無断で休むということはやはりかと、近右衛門はとりあえずの結論を下す。

「タカミチ君、心して聞くのじゃ。実はな……」

「あわわわわ、どないしよ……」

和泉亜子は焦り、迷っていた。原因は目の前で行われている卑劣な行為。

「いいじゃねぇか、ちょっとくらい。遊びに行くのに金が足りねぇんだよ」

高校生くらいの不良たち4人が気弱そうな少年に絡んでいる。所謂カツアゲというものだ。

「そんな……、ちょっとって……」

どうみても少しの金額では済まされない雰囲気である。少年は涙を滲ませながら、最後の、ささやかな抵抗をする。

「いいから早く出せや！　教師どもが駆けつけてきたら面倒になるだろうが！」

通りを歩く者達全員に聞こえるような声で不良の1人が怒鳴った。そうでなくとも、その辺りにいる者達はこの状況が目に入っている。通りの端とは言え、目立つ髪色の男たちが少年に絡んでいるのだ。嫌でも目に入る。

（だ、だれか……！　助けてあげて……！）

亜子は心の中で必死に叫ぶ。全員が見て見ぬふりをし、歩き去っていく中で、亜子は立ち止っていた。助けることもできず、かといって逃げることもできずに。

（そ、そうだ。先生に連絡すれば……！）

平常時ならばすぐ思いつきそうなことだが、人間実際にその場に遭遇してしまうと、中々それを実行するのは難しい。

「痛い目にあいてぇようだな！」

（ッ……！）

男が拳を振り上げる。亜子の行動はとてもじゃないが、間に合いそうにない。

だがその時、亜子の脳裏に自身のクラスメイト達の姿がよぎった。2―Aの皆の姿が。自分とは比べ物にならないほど優秀で、そして強い心を持っている者達。亜子はいつもその陰に隠れるようにしてきた。しかし、自分は脇役でいいと思いつつも、亜子は憧れていた。舞台で主役になれるであろう彼女達に。

彼女達ならどうするだろうか。そう自問した。答えは既に決まっていた。

「やめてください！」

気付けば声を上げていた。自分でもこんな大きな声が出るとは思っていなかったほどに。

「あぁ？」

男達が自分の方を向く。８つのギラギラした目がこちらを見つめている。

「あ、あぅ……、やめてください……」

亜子は後悔した。舞台に上がり、観客の目がこちらを向いてしまったらもう無理だった。男達の悪意は今自分に向けられている。その悪意を傍目から見ているだけだったらまだよかった。しかし、それが

自分に向けられると、もうだめだった。

「はっ！　てめえが俺達の遊びに付き合ってくれるってんならいいぜ？」

下衆な言葉と笑みと共に、男が亜子の腕を掴む。

「い、嫌や！　離して！」

「っ！　このアマ……！」

男の握力は強かったが、全身に力を込めて、亜子はそれを振りほどく。だが、それこそ全力で振り払ったため、体勢を崩し、横のビルの壁へと頭をぶつけてしまう。

「い、痛い……」

ぶつけたこめかみの辺りを手で触る。ぶつかった衝撃自体は強いものではなかったが、どうやら擦り傷を作ってしまったようで、亜子の手に自身の血が少量ではあるが、付着していた。

「あ、あ、あぁ……」

それこそ少量ではあったが、精神が極限状態だったこと、血が苦手であったことも相まって、亜子はその場に倒れ込むように気絶してしまった。

（どこにでもいるもんだな、ああいうのが3、４人で固まって）

亜子が声を上げる少し前、彼女の後方をゆっくりと歩きながら、先

程の状況を笑みを浮かべながら観察していた男がいた。白髪の少年、アカギである。

（ククク……、どいつもこいつも見て見ぬふりか）

ほとんどの者が関わらない、傍観者として歩いている。ただ1人、亜子を除いては。

（さて、あいつはどうするのかね……）

アカギは亜子の背中を凝視する。ひ弱い、あまりにもひ弱いその背中を。

「やめてください！」

（お……？）

勇気を振り絞った亜子の言葉はアカギにもしかと届いていた。弱い者が自分より力の強い者に挑む、その瞬間を確かにアカギは見届けていた。

「ふーん……」

だが、それも最初だけ。徐々にその気概が薄れ、ついに亜子は気絶までしてしまった。

（やるじゃん）

それでもアカギは亜子を褒め称えた。最後こそ情けなかったものの、彼女は強かった。４人で気弱そうな少年からカツアゲをする不良達、それを1人で止めに入った亜子。どちらが気持ちの面で勝っていたか、強かったかは明白である。最初だけだったが、彼女は自分より

力で勝る、それも４人いた不良達に、確かに勝ったのだ。

「そこのお兄さん方」

既にすぐ近くまで歩いてきていたアカギは不良達に話しかける。

「ここらでやめにしておきませんか？　怪我人も出てしまったことですし」

「あ？　んなことで済むと思ってんのか？」

無論、アカギもこれで済まそうなどとは毛ほども思っていない。そして、一歩二歩と不良達い近づいて行く。

「あ、あぁ!?　やんのか、こら！」

不良達は臨戦態勢に入る。白髪の少年が薄ら笑いを浮かべながら迫ってくれば、そうならざるを得ない。

アカギは素早い動作で不良の１人の腕を掴む。

「て、てめえ……！」

当然、その男は拳を振り上げ、アカギを狙う。

「これで手打ちにしませんか……？」

それより早くアカギはポケットから何かを取り出し、男の手へと押し付けた。

「は、はぁ？」

男は拳を下げ、逆の手に握られたものを見る。それは札。福澤諭吉

の肖像画が印刷された一万円札。それがパッと数えられないほどの枚数握られていた。

「へ、へへ……、話が分かるじゃねぇか」

へらへらとしたいやらしい笑みを浮かべそう言うと、不良達はそそくさと走ってどこかへ行ってしまった。アカギはそれを冷え切った目で見送った。

「あ、あの……、ありがとうございます」

そう礼を言う気弱そうな少年だが、その顔には誰の目から見ても明らかなほど申し訳なさそうな表情を浮かんでいる。無理もない。自分を助ようとした少女は怪我をし、助けてくれた少年は大金を失ったのだ。

「礼ならこの娘に言いなよ。って言いたいところだけど気絶してちゃあしょうがねぇよな」

金を失ったことはたいして気にしていないアカギだが、気絶している少女を見つめ、珍しく困った顔をしていた。

「何故もっと早く僕に伝えてくれなかったのですか、学園長！」

「す、すまぬ」

アカギの件を一通り説明されたタカミチは珍しく、人に対して声を荒げていた。

「わし自身で調べてからタカミチ君に相談するつもりだったんじゃ

……、刹那君から話を聞いたとき、その男が怪しいと思ったのはわしの勘だったからの……」

組織の長である以上、ある程度証拠がなければ報告すべきだはないと近右衛門は考えた。さらに、今はいつも以上にどたばたしているため、余計な心配を掛けたくなかったという思いもあり、勘で部下を動かすことはできなかった。

「とにかく、今は刹那君に話を聞こう、タカミチ君」

そう言うと、近右衛門は腰を上げた。こればかりは自分の失態である。部下に任せ、自分は椅子に座っているなどできるはずもない。

「随分と面白い話をしているじゃないか」

それと同時、扉が乱暴に開かれ、1人の少女が現れた。いや、正確には少女の形をしたものか。

「エ、エヴァンジェリン……、どうしてここに……?」

「なに。今日は茶々丸がメンテナンスでいないんでな。たまには貴様と将棋でも打ってやろうと思っただけさ」

足元にも届きそうな長く美しい金髪を揺らしながら、彼女はその碧い瞳で狼狽している近右衛門とタカミチを見据える。

「そのアカギとかいう小僧、私に任せてもらおうか。ついでに刹那の方も面倒を見てやる。ああいう奴には私の方が適任だ」

「ハッ……! こ、ここは?」

冷たいベンチの上で、亜子は目を覚ました。

（た、確か、ウチ。血を見て……）

「ああ、起きましたか」

横たわっている亜子に背もたれに手をつき、彼女を覗き込んでいる少年が声をかけてきた。亜子と同じ、色素の薄い髪を持つ少年である。

「あ、あの。あなたは？」

「アカギという者です」

アカギの自己紹介を受けながら、亜子は自分のこめかみに手を当てる。だが、痛みはない。いや、傷自体がないのだ。

「あ、あれ？　ウチ、確かにここを怪我したはずやのに……」

「何のことかわかりませんが、あなたはカツアゲをしているチンピラに立ち向かって気絶したんですよ。よほど怖かったんでしょうね、気絶してしまうなんて……」

アカギの言葉に少し疑念を抱きながらも、亜子は事がどうなったのかが気になった。

「あの人たちは？」

「ああ、追っ払いましたよ」

あまりにも涼しげな顔で言うので、亜子は驚いてしまった。体格だけで言えば確実に相手の方が上であり、さらに４人もいたのだから、どう考えてもおかしい。

「ククク……、なに、ちょっとばかし金を握らせただけですよ」
「ええ!?」

表情から亜子の疑問を感じ取り、アカギは答えた。しかし、その答えは亜子にとって納得できるものではなかった。血が流れるのは嫌だが、それでもお金で解決するなどと。

「あ、あかんやん！　そんな、あなたのお金やのに！」
「別にかまいませんよ。それよりもあそこは穏便に済ます方が得策だった。ただそれだけのこと……」

武力で黙らせてもよかったアカギだが、やはり衆目監視の場でそれをするのは躊躇われた。

「他に何もなければ俺はこれで失礼しますが、1人で帰れますか？」
「は、はい……」

辺りを見れば少し暗くなっている。2時間ほど気絶していたのだろうか。

「あ、あの。ウチは女子中等部の2―A、和泉亜子です」
「では和泉先輩、さようなら」

そう言うと、アカギは帰路を歩き始めた。

「後輩だったんか……」

亜子の目にはそうは見えなかったが、正真正銘、アカギは亜子より年下である。

（すごい人なんやろうな……）

この極短時間話しただけだが、亜子は自分にはないものをアカギに感じていた。主役に、物語の主人公になれる資質。それこそ、脇役すら舞台の上から叩き落としてしまうかのような強烈な印象だった。

（2―Aというと確か古菲とかいうのと同じクラスか）

アカギは歩きながら考える。そうなると必然的に木乃香や明日菜とも同じクラスである可能性が高い。2人のクラスは知らないアカギだが、おそらくそうだろうと踏んでいた。

（ということはあの剣士もそうか……）

先日アカギに突っかかってきた未熟だが、才能を感じさせる剣士。名も知らぬ女だが、アカギの記憶には残っていた。

（まぁ、俺が考えてもしょうがないことだ）

この時のアカギはまだ知らない。自分を取り巻く環境が急激に動き始めたことを。そして彼女らと同じクラスに籍を置く、麻帆良に住まう最強の吸血鬼、その者との対決が避けられないことを……。

狂気の法

「あ！　亜子、おかえり！　どこ行ってたの？」

無事寮への帰還を果たした亜子を待っていたのは、ルームメイトである佐々木まき絵。新体操部に所属する天真爛漫な少女である。

「今日はサッカー部休みやったし、マネージャーの仕事もなかったから買い物に行ってたんよ」

「亜子が1人で？　珍しいね」

亜子は自分を弱い人間だと思っている。事実そうだろう。何をするにも友人の同意や後押しを必要としているため、1人で何か行動するのも稀である。

「で、何を買ってきたの？　何も持ってないけど」

「え⁉　あはは……。特に目ぼしいものがなかったんよ」

特定の何かを買おうと思って出かけたわけではなかった。ただの気まぐれで出かけ、適当に店を見て、何か欲しいものがあったら買う。そんな程度でふらふらしていただけだった。

「ふぅん、まぁいいや！　それよりご飯食べに行こ！　部活で頑張っちゃったからもうお腹ぺこぺこだよ～」

「そやね。ウチもぺこぺこや」

帰ってきたばかりだが、その足ですぐ食堂へ向かおうと、扉を開ける。自室の外に出た亜子の視界の隅に、美しい金色の何かがちらりと入った。

「あれ？　エヴァンジェリンさんやん。女子寮におるなんて、珍しいなぁ」
「え？　本当だ、珍しいね。あ、でも時々だけど寮の大浴場を使いに来ることもあるみたいだよ」

挨拶をする間もなくすたすたと歩いて行ってしまう。クラスの中でもかなり小柄なエヴァンジェリンだが、その背中にはそうとは思えないほどの貫録を2人に感じさせていた。

「ここだな……」

エヴァンジェリンはある部屋の前で立ち止まる。入居者の名札プレートには龍宮真名、そして桜咲刹那と書かれている。
何の遠慮もなくエヴァンジェリンは扉を開けた。どうやら鍵はかかっていなかったようだ。

「情けない面だな、桜咲刹那よ」

どかどかと入り込んだ先に見えたのは、部屋の隅で膝を抱えている刹那。その顔からは生気が感じられない。明かりが点いていない暗い部屋の中でも、刹那のいるところだけさらに暗く感じてしまうほどだ。

（まったく、忌々しいな）

エヴァンジェリンは今の刹那の表情、そして纏う雰囲気を知っている。それはかつての自分のものと同質であった。自分が吸血鬼であることを受け入れられず、世界を呪った弱い頃の自分。エヴァンジェリンにとっては反吐が出そうなものだたった。

「何があった？」

エヴァンジェリンが不愛想に聞くが、刹那は答えない。

「では質問を変えよう。アカギという小僧を知っているか？」

その言葉に刹那の表情が動いた。彼女の心に引っ掛かったのはアカギという名前。

「どこで、その名前を……？」

「なに、少し盗み聞きしただけだ。もう一度問うぞ。何があった？」

追及は避けられぬと感じたのか、刹那はアカギについての情報を語りだした。その表情には感情が窺い知れない。努めて感情を殺し、刹那は語っていた。

「なるほどな。それぐらいのことで、そこまで気分を沈ませるとは、全く以って情けない」

その言葉に、あなたに何が分かると口にしそうだった刹那だが、何とか思いとどまる。彼女は吸血鬼だ。自分よりも人間と相容れない存在。それこそすべて分かっているだろうと刹那は考えた。

「ふん。明日土曜日の昼前、１１時くらいにここへ来い」

そう言うと、エヴァンジェリンはその行き先が描かれた紙を刹那に投げつけた。

「いいものを見せてやる」

不敵に笑い、エヴァンジェリンはその場を去った。

「ん？」

土曜日の朝、自室で朝食をとろうとしていたアカギの元へ、客人が1人訪れた。

「はい」

ノックの音が響いた後、扉を開けたアカギの目に飛び込んできたのは異様な人物だった。そもそも人物と言っていいのかも分からない。

「これはこれは、一体何の御用でしょうか？」

目の前にいるのは人形のような、ロボットのようなもの。

「絡繰茶々丸と申します。少しお時間よろしいでしょうか？」

「今ちょっと忙しいですね。申し訳ない」

茶々丸の自己紹介と提案を聞いた後、アカギは扉を閉めた。

だが、その後もノックの音はしつこく続く。

「わかりましたよ。ささっと朝食を済ませますから、待っていてください」

そのしつこさに、さすがのアカギも折れたようだ。

「朝食は何を召し上がったのですか？」

アカギをとある場所へ案内する最中、茶々丸がそう問う。

「カップラーメンですよ。あんたが来た時まだ3分経っていなかった」

「もっと栄養のあるものを召し上がった方が良かったと思いますが」

その言葉に少し違和感を覚えたアカギ。

「たまにはそういうのを食っておくと、栄養のあるものを食った時のありがたさが大きくなるのさ」

「なるほど。一理ありますね」

そのような会話を続けていると、随分と学園の外れの方まで来ていた。既に周りに人通りはなく、代わりに木々が生い茂っていた。

「こちらです」

そこにあったのは簡素だが、落ち着いた佇まいのログハウスだ。

「ふーん。趣味が良い家ですね」

「ありがとうございます。私の主も喜ぶでしょう」

(俺に用があるのはその主様って訳か)

ログハウスの中へ通され、そのままの足で地下室へと案内された。茶の1つでも出してくれればいいのにとアカギは思ったが、特に口には出さない。

「この中で我が主がお待ちです」

「ククク、なるほど。こいつは面白くなりそうだ」

そこにあるのは水晶のような球状の物体。おそらくこの中には異空間のようなものが広がっているのだろうとアカギは当たりをつけた。その中心にはこの中に広がっているであろう建物を模したミニチュアも浮かんでいる。

「それじゃあ、御邪魔させてもらいますよ……」

「ええ、お気をつけて」

茶々丸の意味深な言葉を耳に残し、アカギはその異空間へと足を踏み入れた。

「ッ！」

そこでアカギが最初に味わったものは、強烈な蹴りであった。それこそ容赦のない、下手をすれば死んでしまうような一撃だ。首を狙ったその蹴りを、アカギは腕を使い防ぐ。

「随分待たせてくれたじゃないか、小僧」

アカギが視界に捉えるのは、蹴りを放った張本人。金髪の吸血鬼である。

「こんな蹴りを喰らわなければならないほど、遅れたとは思えないが」

「しっかりとガードしていたくせに何を言う。それに外での1時間がここの24時間、つまり1日に相当する。1分遅れるだけでここでは24分待たされることになるんだよ」

外で待っていればいいのにとアカギは思ったが、それを言えば今度

は先程以上の攻撃が飛んでくるだろう。

「それで吸血鬼が何の用？」

「察しが良いな。その通り、私は吸血鬼の真祖、エヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。聞いたことくらいあるだろう？」

闇の福音。悪の魔法使いの代名詞だ。当然アカギもそれくらいは知っている。

「人間と仲良くできないから、人形と仲良し小好しってか？」

「無駄口が過ぎるな。これから何をするか分かっているだろうな？」

エヴァンジェリンの言葉にアカギは言葉では答えず、行動で答える。

ポケットの中から1枚の札を取り出したアカギ。それを見てエヴァンジェリンは感嘆する。

「ほう。パクティオーカードのアーティファクト召喚システムだけを流用した護符か。さぞ高値だっただろう」

「なに、安い買い物だったさ。来たれ……」

アカギが呟くと、その手に持つ札が光だし、アカギの武器へと変化する。

「何だ。剣士だったのか？」

アカギの右手にあるのは両刃の片手剣。誰でも扱いやすそうな簡素な造りの剣だ。

「いや。ただ剣っていうのが武器として分かりやすいものだから使っているだけだ」

剣士でも何でもないと言うアカギを、エヴァンジェリンは観察する。

（どうやら魔剣、聖剣の類ではないようだな）

何の変哲もない剣だが、かえってそれがエヴァンジェリンの警戒を強める。

「まぁ、これで終わりじゃないぜ……」

そう言うと、アカギは剣の柄に近い刃の部分に親指を押し当て、その指に傷をつける。

「ほぉ、血液を介した武器へのエンチャントか」

アカギの親指から流れ出た血液が、剣の刃へと吸収される。まるで剣がそれ飲み干したかのように血液自体は消えていた。

（なるほどな。あの剣は武器と言うよりただの受け皿か。奴のほんとうの『武器』はその付与された効果そのもの）

エヴァンジェリンはその豊富な知識と経験からアカギの『武器』の本質を捉える。そして、その答えは正解だった。

魔法や呪術と血液が切っても切れない関係であることはエヴァンジェリンが自身の存在を以って証明している。強力な契約にも使われる血液は、使い方によっては強力な武器になるだろう。

「さぁ、来いこぞ――」

小僧、と言い終えることはできなかった。その前に不測の事態が起

きる。エヴァンジェリンの左腕が宙を舞っていた。

「な、に……!?」

エヴァンジェリンは後ろを振り返る。自身の鮮血が飛び散り、赤いベールを作っている、その向こう側にアカギは立っていた。先程まで反対側にいたはずのアカギが。それも余裕の表情で、左手をポケットに突っこんで立っている。

(どういうことだ!? この私が、実力の半分以下の力しか出せない身とはいえ、全く視認できないなど……!)

エヴァンジェリンは斬られた腕を再生させながら、考える。

「一体……!?」

と、言い終えた時、エヴァンジェリンはあることに気が付いた。

彼の薄皮の下、体内で、相反する2つの力が暴れ回っていることに。

「貴様、咸卦法の使い手だな!? だが、何故……!?」

「驚いてばかりだな、吸血鬼。程度が知れる……」

アカギの挑発の言葉にも特に反応せず、ただただエヴァンジェリンは驚いていた。

咸卦法。本来、相容れないはずの魔力と気という2つの力を融合させ、自身のポテンシャルを飛躍的に高める究極技法。その体得は極めて難易度が高い。

「だが咸卦法は魔力と気を融合させ、それを身体の内と外に纏う技法のはず、何故貴様は『外』に纏っていないのだ……!? そもそも融合させるモーションを行う暇もなかったはず……!」

それがエヴァンジェリンが気付かなかった理由。咸卦法の使い手を、それを習得するまでの道のりを見てきた彼女の目を欺いた要因。アカギは身体の外にその力を纏わず、ただ内にのみ宿している。

（いや……）

そこでエヴァンジェリンは驚愕の事実に行き着く。

「貴様、死にたいのか……？」

魔力と気は相反する。だからこそ、それを無理やり融合させる咸卦法は強力無比なものなのだ。それに使う魔力と気が強ければ強いほど、力は相乗し強くなるが、失敗の代償は大きい。通常ならば身体の内だけでなく外にも纏っているため、失敗しても力が霧散するか、軽い怪我で済む。

（だが……）

アカギの咸卦法は通常のそれとは違う。本来身体の外に纏うはずの力を無理やり内へと押しこめている。その全てを自身の『内』にのみ。そもそもが無理矢理な技法である咸卦法をさらに無理矢理なものとしている。

「制御を少しでも誤れば、それこそ死ぬかもしれんのだぞ!?」

その上、アカギが咸卦法に使っている魔力と気の量はかなり多い。それはアカギが元々持って生まれた容量。才能である。

（少しでも精神が乱れれば、その制御は瞬く間に失われるはずっ……！）

咸卦法は精神を無、平坦なものにすることがなにより鍵となる。
そしてアカギがその精神を乱し、鍵を落とせば、その圧倒的な力に食い殺される。大怪我どころでは済まないだろう。

「腹の中に爆弾を抱えて戦うようなものだ……！　正気の沙汰ではないっ……！」

しかもアカギのそれは外の力がないため、スピードなどの身体能力は、通常の咸卦法とは比べ物にならないほど上がるが、防御力は相当低い。敵の攻撃に対して無防備な状況下でなおその精神は揺れない。

「正気の沙汰で買える人生に、興味はない……！」

それがアカギの答え。
アカギが元々手にしていた才能はかなり高いものだ。それはエヴァンジェリンも感じている。それこそ、順当に成長すれば、肉体のピーク時には英雄と肩を並べられるほどに。失うには惜しい才能だ。
その才能が一瞬の気の緩みで水泡、無に帰す。だが、アカギにとってはそんなことはどうでもよいことだった。普通の者が喉から手が出るほど欲する才能。それをアカギは簡単に捨てられる。

（狂人め……！）

正にその在り方は狂人であった。人間の命の脆さと尊さを知っているエヴァンジェリンにはその在り方は許せないものだ。

（狂っている……。しかし、この強靭で、狂気さえ感じる精神力ならば、可能かもしれない）

自然エネルギーを従え、自身の力とする魔力。自身の内から練り上

げる生命エネルギーである気。その2つを何のモーションもなく融合させ、本来外に纏う力を内に押し込み、それを制御する。

（これほどの精神力……、まったく揺れぬ心。咸卦法とは、そもそもこいつのためにあるものなのかもしれない……）

エヴァンジェリンは恐怖していた。その狂気の沙汰、糸のように細い橋を渡るような行為、それを眉一つ動かさずにこなす、アカギの在り方に。

（やはりじじいの勘は正しかったようだな。前線から退いた近衛詠春では相手にならないだろう……）

心のどこかで、どこの馬の骨とも知れぬ小僧が、大戦の英雄を倒したなどという近右衛門の勘を疑っていたエヴァンジェリン。しかし、その勘が正しかったことを痛感していた。

（私ですら、全力全開の状態で臨まねば倒せないかもしれない……）

既に切り落とされた左腕は再生しきっているが、今の状態では勝てないことを、エヴァンジェリンは悟っていた。

「今回はここでやめておこうぜ」

「は？」

アカギの提案の意味が分からない。今の状態ならばエヴァンジェリンを倒し得るのにそれやめると言うのだ。

「あんた、何かの呪いをかけられているんだろ？　そんな状態じゃあ俺もつまらない……。命の取り合いはお互いベストコンディションでやるべきだ」

エヴァンジェリンはその言葉に驚きつつも、今までの言葉、行動からアカギの本質を視ようとする。

「ふ、ふはははは！　面白いぞ、小僧！」

この男は全力のエヴァンジェリンと戦いたいという。それも魔法史に名を残す伝説級の魔法使いとだ。

「それで、ここからはどうやって出るんだ？」

「この中に一度入ると1日、つまり現実で1時間が過ぎるまで外にでることはできん。それに客人も呼んでいるから大人しくしていろ」

どうやらここで1日暇をつぶさなければならないようだ。

「誰が来るんだ？　暇なんだ。教えてくれても良いだろ？」

「桜咲刹那。お前が闘わずして負かした女だ。本当は貴様をいたぶってその無様な姿を見せてやろうと思ったんだがな。当てが外れてしまった」

アカギは刹那の情けない顔を思い浮かべる。

「案外面倒見がいいんだな。で当てが外れてしまって、その次はどうするんだ？」

アカギの言葉にエヴァンジェリンは頭を抱える。どうやら自分が勝てない相手だとは思っていなかったようだ。

「いいぜ、俺があいつを立ち直らせてやる。俺に負ける前、それよりも高く飛び立たせてやる」

「自業自得とは言え、お前も中々面倒見が良さそうじゃないか」

２人とも笑ってはいるが、何かあればすぐ血が流れるようなことになってしまう雰囲気だ。

「じゃあ、どこか寛げる場所に移動しようぜ」

アカギがそう言うと、エヴァンジェリンは別荘内部の案内を始めた。

しかし、２人はそんな状況でも考える。相手の心理や本質を。待ち人が来るまでの間、互いが互いの本質を見極め、倒す方法を模索する、壮絶な腹の探り合い。２人の対決の第二幕が始まろうとしていた。

幻視する異端者

「ここで待っていろ」

『別荘』の一室をアカギに与え、エヴァンジェリンは再び歩き出す。

（たいした小僧だ……）

考えるのはアカギのこと。彼の持つ異常性。彼女はそれを己の経験で量ろうとしていた。

（奴は、おそらく無意味に死ねる……。生にも死にも、意味や理由を求めない人間）

大切な何かのために死ねる者はいても、何の意味も理由もなく、自分の死を受け入れられる者は少ない。

（それでいて、決して自分の舵取りを怠らない）

自分という船。それを制御する舵から絶対に手を離さない。どんな脅し、拷問を受けても、その命が尽きるまでその舵を握りしめているはず。そうエヴァンジェリンは考えた。その結果があの悪魔染みた咸卦法だと。

（だが）

吸血鬼は笑う。獰猛に。こんな笑い方をしたのは久しぶりだ。

（見誤ったな、天才）

勝てる。殺せる。自分を完全に制御、征服している天才が、唯一見誤っている大切なもの。それが突破口となり得るとエヴァンジェリンは確信する。

（見ていろ。お前のその、無敵の幻想。それをいつかがたがたに崩してやる……！）

「はぁ」

案内された一室。アカギは豪奢なベッドに寝転がり、考える。

エヴァンジェリン・Ａ・Ｋ・マクダウェル。吸血鬼の真祖。悪の魔法使い。その本質を見極めようとする。何がこの女の核なのかを。

（寂しがりが……）

寂しがり。現在の彼女の中で最も大きなものだとアカギは考えていた。

おそらく、かつてはそれが原動力であったはず。孤独だったから、自分が強くあらねばならなかった。そして彼女の孤独は孤高になった。

（おそらくは１４年前）

今から１４年前、公式記録ではエヴァンジェリンは大戦の英雄、ナギ・スプリングフィールドに封印されたとある。

（その時からだろう。奴の孤高が変性したのは……）

孤高だった彼女に何かしらの転機が舞い降りた。そして他者との

繋がりを手にした。
しかしその繋がりは希薄で、中途半端なものだったのだろう。少なくとも、彼女は満足できなかった。乾ききった身体に水を数滴与えてもほとんど効果はない。だが、彼女は味をしめてしまった。そして、他者との繋がりの味、この学園の雰囲気、様々な甘さが彼女の孤高を孤独へと、孤独から寂しがりへと変化させた。

(だからお前はあの剣士を放っておけなかったのさ)

それがアカギを確信へと至らしめた。一を聞いて十を知るように、少しの匂いから相手のイメージを増大させていく。
エヴァンジェリン自身は刹那への扱いを、強者が弱者に手を差し伸べるような、チャンスを与えるようなものだと思っているだろう。弱かったころの自分を見ているようで反吐が出る、などと言うかもしれない。
だが、アカギはそれを弱者が自分の同類を求めているようなものだと考えた。放っておけないのだ。自分と近しい存在を。理解し合い、繋がることができるかもしれない存在を。
もちろんそれは悪いことではない。支え合うこと。生きる上で重要なことだ。しかし、エヴァンジェリンは目を背けた。悪いことでもないのに、それを自分の弱さだとして、無意識に目を背けている。

(お前は『吸血鬼』という不死の要塞に守られた寂しがり。その強固で広大な要塞の中、孤独に苛まれている哀れな子羊に過ぎない……)

彼女は自身の経験、知識、力でその要塞をより強化してきた。だが、強化すれば強化するほど、彼女の元まで侵入してきてくれる者は少なくなる。
アカギは知る由もないが、だからこそエヴァンジェリンは愛し求めたのだ。その要塞へずかずかと、土足で入り込んできたある男を。

（今に見てな……。お前をそこから引きずり出してやる。その時がお前の破滅、そして……、お前の心が満ちる瞬間だ……！）

「ここは……？」

京都、関西呪術協会総本山。とある一室で1人の男が目を覚ました。

（傷は……、まだ完治はしていないか）

近衛詠春、この地の長である。

（やはり、私は敗れたのか）

思い出すのは1人の少年。自分を負かした者のこと。

（アカギ君、だったか。強かったな、彼は）

詠春はアカギが自分に重傷を与えたことに関して、怒りや恨みなどの感情は持っていなかった。

侵入方法こそ不法なものだったが、アカギは詠春に対して決闘を申し出た。不意打ちや襲撃ではなく、決闘を。詠春はそれを承諾した。剣士としての血が、アカギと闘いと騒いだ。それほどアカギから強烈な『強さ』を感じ取った。

一組織の長としては失格だと、詠春は自覚していたが、それでも彼に怒りや恨みは抱かない。決闘で自分を負かした相手にそんな感情を抱くなど、剣士としての自分が許さない。

だが

「彼は……、危うい……」

（身体が、重い……）

刹那は足取り重く、森の中を進む。

（重い……）

肩に背負った太刀が重い。元々重いものだが、今は実際の重量以上に刹那の肩に負担を掛ける。恩人から譲り受けた剣。大切なものを護るための刃。弱々しい今の刹那には荷が勝ちすぎる代物だ。

「ここか……」

エヴァンジェリンに渡された地図通りに、目的地へ着いた刹那。すると、そこに建つログハウスから見知った顔が出てきた。

「絡繰さん……」

「お待ちしていました。中へどうぞ」

先程のアカギと同じように、茶々丸は刹那を家の中へ、そして地下室へと案内する。

「これは？」

「マスターの別荘です。この中でマスター達がお待ちです」

気乗りしないが、あの吸血鬼に逆らえば、何をされるか分からない。

「……」

水晶の前に立った刹那の目の前が真っ白になる。

「来たな。早速だがついてこい」

気が付けば南国のリゾート風の空間へ来ていた。そこで刹那を待っていたのはエヴァンジェリン。何か問う気力さえなく、刹那はただエヴァンジェリンについて行く。

「ここだ。生憎私は言葉を持ち合わせてないのでな。お前のことはここにいる奴に丸投げする」

言うだけ言うと、エヴァンジェリンはどこかへ消えてしまった。相変わらず行動が読めないが、そもそも自分の頭では彼女の考えを読むこと等できないと、刹那は目の前の扉に集中する。

（まさか）

嫌な予感がする。そして、刹那の頭でも少し使えば、ここにいる者の正体は大方見当がつく。

刹那は自身の剣を持ち直し、その扉のノブへ手を掛ける。

「やはり、貴様か……！」

扉を開けた先にいたのはアカギ。椅子に座り、呑気に茶菓子など口にしている。

「どういうことだ、これは……!?」

「ああ、ちょっと腹が減っちまってな」

その言葉に刹那の怒りが高まる。

「まぁ、そこに座りなって」

アカギが提案する。しかし、刹那はそれを受け入れない。

「ククク、まぁいいか」

「さっさと用件を話せ！」

こんな男とは一分一秒も一緒にいたくないと、刹那はアカギに先を促す。

「随分と落ち込んでるようじゃないか」

「誰のせいだと思っている……！」

今すぐ叩き斬ってやりたいと思う刹那だが、それができない。また先日のようなことになってしまうのではないかと恐れている。

「やれやれ……。では質問しよう。あんたは何のために生きている？」

（今度は哲学の話でもするつもりか……？）

疑念を抱く刹那だが、こればかりははっきりと答えなければならない。これを曲げれば自分が自分ではなくなってしまう。

「木乃香お嬢様のためだ！」

きっぱりと、そう答えた。この男は笑うだろうか、否定するようなことを言ってくるだろうかと、刹那は心の警戒を強める。

「なるほど。では何が一番恐れている？」

そんな警戒も空しく、アカギは刹那の心へ刃を突き立ててくる。

「そ、それは……」

言葉に詰まる。それをお構いなしに、アカギは追撃の手を緩めない。

「大切な人に、自分の存在を否定されるのが恐いか？」

核心を突いてきたアカギに、刹那は遂に剣を抜き、激昂した。

「そうだ！　私は恐い！　自分が烏族との混血だと知られるのが、木乃香お嬢様に非難されるのが、何より恐ろしい！」

怒りと共に、悲しみが、涙が押し寄せてくる。

「笑うか？　弱いと。蔑むか？　結局自分が可愛いんじゃないかと！」

ここまで来ればもう止まらない。弱気で卑屈な言葉が止まらない。土砂のように流れ出てくる。

「私は……、生まれた時から否定され、非難されてきた。両親には愛されこそすれ、その両親が死んだ後は、里の者から疎まれ、そこから逃げ出した」

彼女は色が違った。周りと。決して交わらない色。それを持って生まれてしまった。

「だから恐いんだ……。あの目を知っているから、木乃香お嬢様にあ

の目を向けられるのが恐い……」
「確かに弱い。そして自己愛も確かにあるだろう」
　アカギが口を開く。刹那の表情が絶望に変わる。本当は否定してほしかった。大嫌いな男でも誰でも良いから自分の嫌な部分を否定してほしかった。
「だが何で信じられないかね……。あんたは、あんたが守りたいと願う人より、あんたを疎んだその故郷の奴らの方を信じている」
　その言葉にハッとする刹那。確かにそうだ。正論だと刹那自身も感じた。だが
「それでも……！　万が一……、万が一にも！　木乃香お嬢様に自分を否定されると思うと……。もしそうなったら、私は生きてはいけない……！」
　頭では理解している。だが、それでも拭えない。万が一にばかり目が行ってしまう。足が竦んで前へ進めない。
「ククク……。その万が一だと自分で分かっているじゃないか。万が一の失敗なんてそれこそ大通しさ。迷わず命を賭けられるものだと思うけどな」
「それこそ貴様に何が分かる！　傍から見てるだけだからそう言えるんだ！　言うだけなら誰でもできる……！」
　刹那は理解していた。今正しいのは自分ではなく、目の前の男であることを。自分が臆病なだけであるということを。
「そうか。そうだな……。言うだけなら誰でもできる……！　全く以ってその通りだ……！」

その言葉に刹那の心が抉られる。自分のただの八つ当たりを、この男はその通りだと言う。それがたまらなく屈辱だった。施しを受けているようだった。

「ならば行動で示すとしよう」

そう言うと、アカギは立ちあがり、ベッドの小脇に置かれている袖机からあるものを取り出した。

「なんだ、これは？」

それは小さな悪魔像。掌に乗ってしまうようなサイズだ。

「背水の陣という言葉は知っているか？　これはその効果を現実的にするためのものだ。言わば、自分との契約。自分で目標を設定し、それが達成できなければ、それ相応の対価を支払う。ただの酔狂さ」

アカギは説明しながら、それを机に置き、椅子に座り直す。

「長く生きてると色んなものを持っているものだよな……、さすがは吸血鬼の真祖といったところか。潔く貸してくれたぜ。そしてこのコイン……」

アカギはポケットから1枚のコインを取り出した。

「俺が設定した目標はこのコインを投げ、表を出すこと……」

そのコインをアカギは自分の親指に乗せる。

「失敗した時の代償は、俺の命……！」

「なっ!?」

意味が分からなかった。とにかく止めるしかない。刹那はそう思った。

「ま、待て！　何を言っているのだ、貴様は!?」

刹那の声にアカギは手を止めたが、その表情は全く揺れない。

「こんなことをして、貴様になんの得があるというのだ!?」

必至にやめさせようとする刹那。いくら気に食わない男でも、目の前で人が死ぬかもしれない状況を黙って見過ごせるほど、彼女は冷血ではなかった。

「ククク、得か……？　確かにない。だがな、他者の意志を捻じ曲げようと、従わせようと思ったら、これはもう、こちらも骨身を削るしかない……！」

「まっ――」

小さな音が鳴った。人の命運を左右するにはあまりにもか細く弱々しい音。

「ッ！」

刹那は息を呑む。そしてコインがアカギの手の甲に着くまでの間、神に祈った。裏は出ないでくれと。刹那はアカギの命に必死になっていた。

パシンと、手の甲を叩く音が響き渡る。すでにアカギの手は重なっている。この手の間に、人の命を乗せたコインがあるのだ。

刹那はそれを、瞬きすら忘れて凝視していた。裏が出れば死。この

男は死んでしまう。それも驚くほどあっさりと。
アカギが手を開けるまでの間、実際は短い時間だが、刹那には永遠にも等しく感じられた。
そして、運命の扉が開かれる。そこで待つのは勝利の女神か、それとも地獄の使者か。
そこには

「はぁ〜……」

刹那は思わずその場にへたり込んでしまう。
そう、安心ゆえに。
コインは表を向いていた。この泥船は人を乗せて無事海を渡りきったのだ。

「ククク……。情けねぇな、他人の命くらいで」

アカギは落ち着いている。死への恐怖も、生還の安堵もそこにはない。ただの事象として受け止めている。

(狂っているっ……!)

おろおろとしていたのは刹那だけ。命を賭けた当の本人は全く揺れていない。

「次はあんたの番だぜ?」

その言葉に刹那の心臓が跳ねる。まさかあの綱渡りを自分にやらせようと言うのかと。

「勘違いするなよ？　あんたがやるのはもっと簡単なことだ。近衛木乃香が自分を受け入れてくれるかどうか、それに命を賭けてもらう」
「なんだと……！」
「ああ、だがこいつはあんたには必要ねぇな……」

アカギは契約の悪魔像をベッドの上に放り投げる。

「どういうこと、だ……？」

あれがなくては奴の言う賭けはできないのではないかと、刹那は疑念を抱く。

「ククク、そりゃそうだろ。さっきあんたは言ったよな？　木乃香お嬢様に自分を否定されたら生きてはいけない、と……」

確かに刹那はそう言った。そしてそれは紛れもない本心。

「なら必要ねぇだろ……！　失敗すれば、否定されれば生きてはいけないんだろ……？　つまりあんたはこんなもの使わなくても、勝手に死んでくれる」

刹那は恐怖を感じた。先程までとは違う、現実感のある恐怖。死がすぐ後ろまで迫ってきている、そんな錯覚に陥る。

「何もいますぐにとは言わない。５年後でも１０年後でも、まぁ俺が生きている内に済ませてくれればいい。俺はただ、いつか打ち明けるという意志を確認したい……！」

アカギはさらに続ける。

「あんたの近衛木乃香に対する忠誠、友情は誇っていいものだ……！

俺みたいな自己中心的な悪党、チンピラには一生真似できねぇ……！」

刹那の眼から涙が流れ落ちる。自分の中の何かが満ちていくような、そんな感覚だ。

「そしてその忠誠、友情はあんたが自分の意志で手にしたものだろう？　その必死になって手に入れたものが、あんたが生まれ落ちた時から既に手にしていたようなもの、故郷の同胞が忌したようなものに負けるとは、どうしても思えねぇ……！」

刹那はアカギの言葉を聞いていた。粗悪だが、その言葉の真意は確かに刹那の心の暗雲を晴らしていく。

「だから、安心していい……！　あんたが命を賭けると選んだ友を信じてやれ……！　自分の判断に、命を委ねてみろっ……！」

刹那の涙は止まらない。既に剣を落とし、両手で必死にその流れを止めようとするが、止まらない。心が満ちていくにつれ、行き場を失った涙が溢れているようだ。

「あ、ありが……、あり、がとう……！」

嗚咽交じりに刹那は礼を言う。はっきり言って、この男に対する悪印象は完全に消えてはいない。

（この男は、私を勇気付けるために、態々命を賭けるような真似までした……！）

万が一と自分でも理解している失敗の可能性。そんなものはアカギの行った2分の1の死に比べれば、それこそスズメの涙にも満たな

い。それをアカギは身を以って証明した。
そんなことをされては感謝せざるを得ない。礼の言葉を口にするより他はない。たとえ相手が悪党だったとしても。
「おいおい、ちょっと泣き過ぎだぜ。水分補給だ。これでも飲みな……」
子供のように泣きじゃくる刹那に、アカギは刹那に綺麗な琥珀色の飲み物の入ったグラスを渡す。そして、刹那は何の疑いもなく、それを喉へと流し込んだ。
「んん!?」
瞬間、刹那がその液体を吹きだした。
「こ、これ、ひゃ、さけじゃない、か……!」
「ククク……、麦茶だとでも思ったのかい?」
無理もない、今刹那は判断力を低下させている。最初にアカギが茶菓子を食べていたこともあって、緑茶でないのは色で分かったが、それを麦茶だと思っても不思議ではない。しかし、実際にアカギが渡したのは高価な焼酎である。
「き、きさま。ころしてやるっ……!」
刹那は剣を手に取り、アカギに対して振り回す。一太刀もアカギには当たらない。だが、刹那の目にはつい先ほどまでの暗さは消え、清々しいほどの晴天のような、そんな光が宿っていた。

悪の資質

「なんだ、泣き疲れて、暴れ疲れて寝てしまったのか？」

ベッドに突っ伏している刹那を見ながらエヴァンジェリンがそう言った。

ことの一部始終を部屋の外から聞いていたエヴァンジェリンだが、刹那が酒を吹きだした辺りからアカギのいる部屋を離れ、少し時間を潰し、またここへ戻ってきたのだ。

「いや、気絶させた」

「……」

それこそ本当に疲れて寝てしまうまで暴れていそうだったため、アカギが早めに手を打ったようだ。

「安心しなよ、別に傷をつけたわけじゃない」

「まぁ、それはどうでもいいが、貴様に１つ聞きたいことがある」

意地悪く笑い、それでいて真剣さが垣間見える表情で、エヴァンジェリンはアカギに問う。

「あのコインの賭けは本当にあの像と契約したのか？」

アカギが刹那を説得する上で、重要な役割を果たしたあの賭け。

「まさか、あんな勝負にもならないものをするものか……」

アカギはそれをきっぱりと否定した。

「そもそも、コインが表になるように手のひらに乗せるなど、造作もないさ。そんな勝ちが見え見えの勝負じゃあ俺は納得できない」

そう、アカギほどの実力者ともなれば容易なのだ。アカギやエヴァンジェリンがその気になれば音速の壁を越えた動きをするなど訳は無い。そういったレベルの速度の中で戦う者にとって、たかがコインの回転を見極めるなど造作もない。近右衛門やタカミチ、アカギが打ち負かした詠春もその域に達しているだろう。

「それで、貴様は何を契約したのだ？」

ここで1つ問題が浮上する。アカギは刹那に既に契約は完了しているような口ぶりで話した。しかし悪魔像に向かいながら、アカギは契約内容に足り得る言葉を口にした。もしもあの時契約していなかったのならば、そのコインの賭けが契約として悪魔の耳に入ってしまう。口は災いの元、という言葉を体現するように、ただ口にするだけで悪魔はそれを嘲りながら契約を完了する。そのため、ほとんどの場合は誘導尋問の類で相手に契約をさせる、詐欺のような用途で使われる魔法具なのだ。

「あのコインの賭けに関する契約内容。あれを口にする前に貴様は既に何かしらの契約をしていないと説明がつかん」

刹那との会話中、アカギの言葉が契約になっていないなら、それは既に未完了の契約がアカギと悪魔像の間に成されていた以外に答えはない。

「ククク……、確かにその通りだ。あんたからあの像を借りてこの剣士が来るまでの間に、俺は既に契約を済ませていた」

その内容とは

「この剣士が自害するか否かを当てる契約をな。もちろん賭けたのはこの剣士が自害しない方だ……」

アカギは刹那の第一印象から、ある匂いを感じていた。そして、予めエヴァンジェリンから聞いていた刹那の身の上話を元に、その勘を確信へと近付けたのだ。

「この剣士は『命』よりも『自分』を大切にしている。自分が自分でなくなるのならば、死を選ぶ者。そういった観点から見れば、俺と近しい存在」

自分を放棄するくらいなら、命を絶つ。自分でない命に価値を見出せない異端者。アカギは刹那もその端くれだと考えた。

「だからこの契約内容にした。案の定、俺の推察は正解。この剣士は近衛木乃香に自分を否定されるならば死ぬと言ってくれた」

刹那の『自分』とは木乃香に認められたい、木乃香を何に代えても護りたいといったもの。それが叶わぬならば生きてはいけないと刹那は断言した。

「なるほどな。だからこそのあの実質無期限という発言か」

俺が生きている内に済ませてくれればいいとアカギは言った。その発言に少しばかりの違和感を覚えたエヴァンジェリンだが、これで合点がいった。アカギの契約、つまり勝負はまだ続いているのだ。

「だがいいのか？　刹那がそれ以外の理由で自殺する可能性もあるんだぞ？」

「別に構わないさ。その時が来たならば、ただ死ねばいい」

これがアカギの考え。勝負の末に死ぬのは構わない。だが、死ぬまでに勝負はつけておきたい。だからこその生きている内に、という発言。

「まぁ、俺はこの剣士を信じているから勝てると思っている。中々美しい契約だと思わねぇか？」

死の運命を共にする少女を見ながら、笑みを浮かべてアカギは言う。だが

「何を言っている。結局貴様は刹那を信じた自分の判断に命を委ねているに過ぎない。貴様が信じているのはただ己のみ」

エヴァンジェリンがそれを一蹴する。

（私と同じでな……）

エヴァンジェリンは自嘲気味な笑みを浮かべる。対して、アカギの表情が揺れることはなかった。

ちょうど正午を回る頃、土曜日だが相も変わらず、近右衛門は学園長室で業務に勤しんでいた。

「ん？」

そろそろ昼食の時間かと思っていた矢先、近右衛門の携帯電話が震える。最近この携帯電話には悪い知らせしか届かないため、憂鬱である。

だがその憂鬱さも、すぐどこかへ飛んで行ってしまうことになる。

「こ、これは……！」

掛けてきた者の名を見るや否や、近右衛門の血相が変わる。

「も、もしもし。婿殿か……？」

『ええ、私です。お義父さん』

その者とは、近衛詠春だった。

「目が覚めたのか。よかった、本当に……」

『本当はもう少し寝ているはずだったようですが、こんな私にも意地というものがありましてね』

さすがにかつて戦場を生き抜き、英雄と呼ばれていることはあった。普通の者ならば、あと2か月は昏倒していたことだろう。

『携帯で失礼ですが、こういうデジタルなものの方が裏の世界の住人には勘付かれにくいもので』

「それは構わぬ。して、そう言うからには何か重要なことを伝えたいということかの？」

『ええ。私を負かした者について』

近右衛門の予想通りの展開だった。これでその人物に関して確信が持てると、心の中でその答えを渇望していた。

『私にはアカギと名乗っていました。白髪の少年です』

その答えに、やはりかといった表情をする近右衛門。だがここで問題が発生する。

（名前まで知っておるのか……。確たる証拠が出てきたのはいいが、これはちと面倒じゃの……）

名前まで割れているとなると、アカギがこの麻帆良学園に在籍していると知られるのも時間の問題だ。

（これはこちらから正直に話すのが良いか……）

ここまで来てしまえば、それが最善と近右衛門は判断した。

「実はの、婿殿が倒されたその翌月の4月、そのアカギという少年がこの麻帆良に生徒としてやってきたのじゃ……」

『何ですって!?』

傷に障りそうな声で詠春が驚く。

「落ち着いてくれ、婿殿。こちらとしても確信が持てなかったんじゃ。だが今となってはそれが事実となった。すぐに身柄を確保しよう」

『待ってください！　私は彼に関してはその行為について、不問としたいと思っています』

「何じゃと!?」

詠春の言葉に、今度は近右衛門が驚く。無理もない、自分に重傷を与えた相手を許すと言っているも同然だからだ。

『そもそも、彼と私が行ったのは決闘です。少なくとも、正々堂々と開始した勝負でした。彼を裁くのは私の剣士としての誇りが許しません』

詠春の剣士としての誇り。近右衛門には十分理解できた。そして、

内心ではほっとしていた。

『そして、それ以外にも理由があります』

「他にじゃと？」

確かに剣士としてはそれで良いかもしれないが、一組織の長としては不十分だ。

『彼と敵対すれば、その敵対した組織が破滅を迎えるからです』

「な……」

その言葉に唖然としてしまう近右衛門。詠春はたかだか中学一年の少年にそこまでの力があると言っている。にわかには信じがたいことである。

（いや……）

だが、近右衛門もそういう先入観に囚われて本質を見誤る男ではない。アカギは詠春を倒しているのだ。そしてその詠春がそう言っているのだ。

『彼の強さは、多少格下でも大勢で囲めば勝てるとか、そういう次元にはありません。一騎当千、あるいはそれ以上。エヴァンジェリンやジャック・ラカンと同次元にある強さです』

「そこまでじゃったのか……」

その2人を知る近右衛門としてはただただ恐怖するばかりである。

『運よく倒せたとしても、その組織が被る損害は計り知れない。そしてその組織は別の組織の侵攻を防げないでしょう』

倒せなくとも破滅、倒せても破滅。文字通りアカギの存在は組織の破滅と等号で結ばれてしまう。

「なるほどの……」

そう話す詠春は電話越しでも分かるほど、雰囲気がかつてのものと違っていた。アカギと闘い、何か思うところがあったのか、戦場を駆けていた頃と同じ、鋭い雰囲気を近右衛門に感じさせていた。

そして、今の詠春ならばやりかねないと感じていた。アカギと敵対し、弱体化した東への侵攻。日本を裏の意味で統一することを。

『私としては穏便にことを済ませたい。そして彼を両組織にとって利益になるように動かすことを提案します』

「ほぉ……」

これは交渉だ、アカギという絶大な力を持った駒を巡る。

『彼は似ているんですよ。ナギ・スプリングフィールドに』

「何じゃと?」

よりにもよって、今では正義の代名詞となっているナギを詠春は引き合いに出した。

『ナギは戦場に立った最初のころは正義の味方、英雄とはあまり言えない男でした。正義感こそ持ってはいたが、戦場で魔法という鈍器を振り回すだけの暴れん坊という印象が強かった』

ナギの父と知り合いであり、彼の幼少期を知る近右衛門もその考えには同意できる。

『ナギは少しずつですが、様々な者達と出会い、別れ、戦い、成長して

いきました。そして、彼に正義の英雄としての道を決定付けたのは、戦争の陰に潜む巨悪の存在でした』

本来、戦争はそれぞれの陣営に正義があり、悪がある、もしくはどちらもない。しかしナギが終わらせた戦争には、それを陰で操る組織があった。

『そういう巨悪があったからこそ、ナギは今正義の英雄と呼ばれているのだと私は思います。あの組織が居ない、ただの戦争ならば、ナギは暴君としての名を残していかもしれません』

「なるほどの……」

そこまで言われれば、近右衛門には詠春の意図を察することは容易だった。人は悪と戦うことで初めて正義として認知される。

「彼を、アカギを悪と戦わせ、正義として認知させようということじゃな？」

『ええ。もし彼が正義と対立し、悪に流れれば大変なことになる。正義の屍で山を築き、その血で河を敷く、それくらい彼ならやってのけるでしょう』

つまりは

(彼には巨悪と戦う、その戦場で死んでもらおうということじゃな……)

そこまで考え、あることが近右衛門の頭を過る。

「ああっ……！」

『どうしました？』

「す、すまん、婿殿。話はあとじゃ！」

言うや否や、近右衛門は電話を切り、ある場所へ向かおうと学園長室の扉を勢いよく開ける。

（し、しまった。エヴァンジェリンに彼のことを任せておったんじゃ……！　まずいことになってなければいいのじゃが……。もし彼が麻帆良と対立してしまったら……）

実際は特に問題はないのだが、この2人の対峙が近右衛門には絶望的なものに見えていた。

そして近右衛門はその老体を酷使し、エヴァンジェリンの自宅へと急いで走り始めた。